

XAFS2022 参加報告

放射光実験施設 丹羽尉博
放射光科学第二研究系 阿部仁

2022年7月10日～15日の期間でXAFS（X線吸収微細構造）の国際会議（XAFS2022）がオーストラリアはシドニーで開催された。この国際会議は3年ごとに開催されるのが通例であり、本来は2021年開催予定だったが、コロナ禍の影響により2021年中の現地開催は延期され、代わりに規模を大幅に縮小したVirtual開催となった。従って今回のXAFS国際会議は満を持してのハイブリッド（対面＋オンライン）開催となった。筆者らは国内外を問わず約2年ぶりに対面での会議に参加することになったのだが、本稿ではコロナ禍における日本とオーストラリアでの対応の違いに主眼を置いて今回の滞在について紹介したい。

我々の出国準備の時点では、オーストラリア入国には通常の電子渡航許可（ETA：Electronic Travel Authority、米国のESTAに相当するものらしい）の他に、3回のワクチン接種証明書が必要とされていた。たまたまではあるが日本出国の2日前にオーストラリアへの入国規制が大幅に緩和され、ワクチン接種証明書の提示は不要となったものの、オーストラリアはパンデミックの初期に世界で最も厳しい入国制限を設けた国のひとつだったため、それなりの覚悟と緊張感を持って入国審査に臨んだ。オーストラリアの主要な空港には、パスポートの読み取りと質問を表示して回答を求める機器と、画像認識機能によってパスポートの顔写真と本人との照合を行う機器の2つから成るセルフサービス型の出入国審査システムが導入されており、我々が降り立ったシドニーキングスフォード・スミス国際空港も同様であった。このため入国審査官とは一切接触せずあけなく入国することができた。なんなく入国したその先で驚いたのは、空港でもダウンタウンでもほとんど誰もマスクを付けていないことだった。空港からダウンタウンへの列車内も含めて、マスクをしているのはほぼアジア人だけだった。言うまでもないが、マスクをしていないからといって黙っている訳でなく、屋内外を問わずごく普通に誰もが会話をしていた。また日本ではよく見かける建物の入口の非接触体温計もどこにも見かけなかった。会議場のシドニー大学の建物内には、マスク着用と、1.5mのソーシャルディスタンスを確保する掲示（図1）があちこちにあったが、掲示のとおり、あくまでも「推奨」という位置づけのようで、大学関係者らしき人達はだれもマスクをしておらず、この国際会議への海外からの参加者だけが辛うじてマスクをしているように感じた。

さて、会議である。パンデミック以前のXAFS国際会議は500人前後が参加するのが通例となっていたが、今回



図1
会場となったシドニー大学内の掲示。マスク着用の推奨とソーシャルディスタンスの確保を促してはいたのだが…。

の現地参加者は125人とこれまでの1/4程度の規模であった。そのため会場はかつてないほどにシンプルで、「受付」の表示すらなく、PCの置かれた長机で参加証のネームカードを渡されただけだった。大学内には講演会場に誘導するための掲示や看板は一切なく、会場となる建物に入ってやっとA4サイズの掲示がわずかにあるだけだった。またオールセッションは座長とマイク係が一人ずつしかおらず、講演時間の管理も座長が行うシステムになっていた。このような運営スタッフの少なさは、コロナ禍での密を少しでも回避するための対策か、と、好意的に解釈することもできそうだが、「座長の依頼が開催1週間前に突然来た」という話を聞いたり、前述の通り感染症対策らしきものは（会場に限らず）ほぼ皆無であることを考えると、単に国民性なのだろうと納得することにした。ハイブリッド開催ということでオンラインでの口頭発表もあったが、発表の録画がwebサイトにアップされているのを視聴するシステムであり、質疑もリアルタイムに直接言葉を交わすとい

うものではなかった。筆者らが参加したことのある日本でのハイブリッドもしくはオンライン会議では、リアルタイムで直接対話できる何らかの環境が設けてあり、質疑やコメント自体は対面での会議と同様に行うことができた。この点、日本人が主催する会議では、従来の対面会議とできるだけ遜色のないように開催するという強い意志と努力を感じるが、これまでにそのような会議を主催された方々には心から拍手を送りたいと改めて思った。会議はできれば面と向かって、そうでなくてもせめてリアルタイムで意見を交わし合いたい筆者らとしては、今回の国際会議のオンライン講演の部分はもの足りないものであった。とはいえ、やはり対面会議の良さを改めて感じた。講演後の質問や、ポスターの出来映えが目に入り何気なく立ち寄ったその発表者らとの会話から想定外の研究や生活の話の聞けたりした。このような会議の本筋とは少し離れた「余白」部分の有無が対面とオンラインの違いなのだろうと感じた。「余白」以外にも、久しく会っていない知人や先生らと面と向かってコミュニケーションがとれることの良さはもはや言うまでもないだろう。

Conference dinner はコロナ禍だからといって中止になることもなく、予定どおりにシドニー湾を周遊するクルーズ船上で開催された。ここでは着席で食事をした後、各々が飲み物を片手に甲板などで団らんするという形式だった。もはや想像に難くないと思うが、テーブル上にアルコール消毒やアクリル板の仕切りはなく、黙食などという注意も一切なかった。

会議は順調に進み毎日楽しく参加していたが、帰国日が近づいてくると徐々になんとも言えない不安にかられるようになった。そう、PCR 検査が待っていたのだ。当時は、有効と認められる新型コロナワクチンを3回以上接種した接種証明書を所持していても、現地出国前の72時間以内に採取した検体が陰性である陰性証明がないと航空機に搭乗できない方針だった。このため万一現地で新型コロナウイルスに感染してしまうと帰国便のキャンセル、宿泊の延泊、場合によっては病院で隔離、それらの問い合わせがにわかに発生する。そもそも海外で医療機関もしくは類似機関を受診するだけでも精神的なハードルが高く、想像するだけで憂鬱になった。ただし、筆者の片方は呆れるほどの楽天主のようで、「もし陽性だったら...」の先は何も考えていなかった。いずれにしろ我々は基本的には日本にいる時と同様に常にマスクをしていたし、それなりの緊張感を持って過ごしていた（つもりである）。滞在地周辺でPCR検査が受けられる病院や会場はいくつかあったが、費用にはかなりの差があった。日本人が常駐していたり、日本語対応が可能な病院などはどこもかなり高額だった。我々は空港に設けられた特設のPCR検査会場で検査を受けた(図2)。ここは空港内にあるという立地はもとより、予約不要かつ費用もリーズナブルであり、検査結果も1.5時間程度にメールで送信してくれた。検査結果が出るまでの時間は何をしても落ち着かない気分だったが、無事陰性結果が届いた時は心底ほっとした。日本帰国の最大のハ-



図2 空港に設置された特設のPCR検査場

ドルはこのPCR検査での陰性証明であることは間違いのないのだが、入国の手続きがやや面倒だった。厚生労働省が推奨するファストトラックを利用するとスムーズに入国できる、ということだったので、指定のアプリケーション(MySOS)をインストールし、パスポート情報、陰性証明、ワクチン接種証明などをアプリ経由で登録、アップロードすると、それらが確認され、一定時間後にアプリ画面が「青」表示になる。日本入国審査時にはそれを見せるだけと思っていたが、飛行機を降り、羽田空港内を延々歩かされた先でその画面とパスポートを提示すると「青い紙」を渡された。そこから更に歩き、その「青い紙」を何方所かで提示し、最後に入国審査をして晴れて帰国することができた。オーストラリアへの入国との差があまりにも激しく、政府の考え方、対応の違いを肌で感じた。それにしても、あの青い紙がなぜ必要だったのかは今でも甚だ疑問である。

今回の海外出張で、日本と海外のコロナウイルスに対する考え方、方針の違いを痛感した。考え方の違いなので善悪の区別はできないが、日本入国のために課せられた多くの手続きなどは次回からはしたくないと強く感じた。世界中が新型コロナウイルスを克服し、以前のように大手を振って会議に参加し、会話をしたいものである。

さて、この会議の現地、オンラインを合わせた全参加者数は288名だったそうである。そのうち日本からの参加は開催国オーストラリアの47名に次ぐ40名だったそうだ。またIXAS(The International X-ray Absorption Society)が主催する三賞のうちDale Sayers AwardをPFのXAFSユーザーでもある近畿大学の朝倉博行先生が受賞し、会議中に授賞式が開催された。これらのことは日本におけるXAFS研究が極めて活発で、その内容も世界のトップレベルにあることを示す良い例といえる。我々は放射光施設で働くスタッフとしてその一翼を担う重責を感じつつ、一層貢献できるように精進することを誓った次第である。